

---

# 死線の向こう

雪無サンタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死線の向こう

### 【Nコード】

N8094H

### 【作者名】

雪無サンタ

### 【あらすじ】

死ぬはずだった場所に死ぬはずだった者がいなかった。気づけば少年は二人になっていた。死の分岐点が視える少年の物語。

## プロローグ

ある町で事件が起きた。大規模な爆破テロ。死者の数381人、重軽傷者46人の大事件だった。

その事件の数少ない生存者の中に1人の高校生がいた。事件後、取材を受けた彼はカメラマンに対し

「あの時、俺は怖くなかったし死ぬとも思わなかった。だって、自分が死なないことを知っていたから」こう言ったそうだ。

プロローグ(後書き)

## 仁と陣

「で、結局の所どうなんでしょうか!？」

学校終わりの放課後、マイクを向けられながら俺は女子から質問を受けていた。

「なんで俺が放課後に質問攻めにされにゃいかんのだ?」

「それはあなたがあの爆破テロで生き残ったからです!水無月仁さん!!!」

「あつ、申し遅れました。私、新聞部の武並杏と申します!」

「知ってるよ」

おんなじクラスなのだから。

「それで水無月仁さん、今日はこれからどちらに行かれるのですか?」

「家に帰るんだよ。後その流暢な敬語はやめろ、変な感じがする。あとフルネームで呼ばれるとコツチも疲れるから、名字か名前のどつちかにしてくれない?」

「じゃあ仁さんで」

普通は名字を選ぶと思うのだが。

「私も同行します」

「なぜ!？」

「だって、部長から「ネタ仕入れるまでは付きまといえ」って言われてるんですもん。何の成果も無しに帰ったら私が怒られます」

「怒られてでも帰れよ、こっちにだってプライバシーがあるんだぞ」

「家に帰る程度の何がプライバシーですか。そんなの私が叩き崩してやります」

会話になつてない気がしてきた。

たぶんどんだけ言っても聞かないだろうし……。

「家着くまでだぞ」

「ありがとうございます!！」

やった、やったとか言ってる武並とは対照的に俺は溜め息をついた。

「仁は歩いて学校まで通っているんですね?」

「ああそうだけど」

「なるほど・・・ふむふむ・・・」

今の質問は必要だったのか？

「次の交差点、左に曲がるぞ」

「なるほど、そっち方面に住んでるんですね」

「いや住んでんの逆方向だ」

「??？」

杏が首をかしげているが、まあ不思議じゃない。家とは逆方向の道を進んでいるのだから。

「何か用事でもあるんですか？」

「いや、ちょっと遠回りしていただけた」

「遠回りですか・・・もしや!?!」

「??？」

「私の身体にはそれほどの価値は無いですよ!いやスタイルにはそこその自信が有りますが危険を冒してまで手に入れたと思う程のものでは」

「何をカン違いしてんじゃ妄想女」

頭の中では一体何が起こっていたのだ。

「ただの気分だ」

ただの気分。杏にはそう言った。しかし、本当は気分ではない。分かっているのだ。あそこを左に曲がれば、自分が死ぬと。

自死の眼。俺はそう呼んでいた。気がついたのは中学1年のときだ。ある日突然自分がある交差点を左に曲がる光景が視えた。気味が悪くなって俺はその日、いつも左に曲がっている交差点を右に曲がった。帰宅後、母親が血相を変えて飛び出してきた。あの交差点を左に曲がった道の向こうで事故があったそうだ。右に曲がっていなければ死んでいたかもしれない。そう思った。

中学2年のとき、俺は興味本位で眼が写す光景の通りに進んでみた。すると、進むたびに新しい光景が目の前に浮かんだ。自分がトラックに吹き飛ばされる光景だった。恐ろしくなると俺はその場から逃げた。それ以来、眼の写す光景の通りに進んだことは無い。行けば死ぬと分かっているから。そのかわり、分かった事もある。眼の写す光景は一日に一回しか見えない。その光景の場所さえ越えてしまえばその日俺は絶対に死なないそれが分かっただけでも収穫だと俺は思っていた。

「仁さん！聞いてますか！！」

ビクツとしてそちらを見てみると杏が怖い顔でコッチを見ていた。どうやら質問されていたようだ。

「悪い聞いてなかった。で、なんだった？」

「さっきの道、やっぱり左に曲がりましたよー！」

「・・・は？」

「私今日は左に曲がるのがラッキーなんです！ずっとモヤモヤしてたんですけど、もう我慢できません。行きますよ！」

「おいちよつと待て。そっちはまずいんだって」

「んなもん知ったこつちやありません！」

俺の首根っこをつかんだ状態で杏があのだ交差点に近付きそして左に曲がってしまった。

さっきまで視えなかった光景の続きが見え始める。

「お願いだから杏！考え直して！今ならまだ間に合つかからー！」

俺を言葉も聞かずに杏はどんどん道を進んでいった。

銀行にいた。杏がお金が少ないから降ろしてきます。と言って俺を引つ張りながら銀行に入ったのだ。

「私の番まであと5分くらいあるのでしばらく待っててください」

「……ただ……」

「へ？」

「何てことしてくれたんだ!!」

怒鳴り散らす俺を周りの奴らが驚いた顔で見ている。

「ど、どうしたんですか仁さん!? 落ち着いてください!」

「落ち着いていられるか! お前の所為で俺は、俺は……」

怒鳴ったって今更どうしようもない。そんなの俺にだってわかっていた。でも……でも。

「動くな!!」

バン! という銃声とともに覆面をした男の声が響いた。銀行強盗だった。

「客は大人しくそっちの隅へ行け! 店員は大人しくこのバッグに金を詰める!!」

おびえる客と一緒に俺は部屋の隅に追いやられた。

「大人しくしていれば危害は加えない。しかし邪魔をすれば、この場で殺す!!」

ひい! という声がいろいろなところから聞こえた。その時、杏が

立ち上がり強盗の前まで歩いて行った。

「なんだてめえは」

「私立赤羽高校新聞部、武並杏」

「取材させてください」

客及び店員、犯人が全員こけた。

「ああ!？」

「だから取材させてください!これは間違いなくトップニュースです!」

「ガキが舐めた口聞いてると殺す・・・」

ギリリリリリリリリリリリリ・・・

店中の防犯ブザーが鳴り響き、店のシャッターがしまった。店員が緊急用の防犯ブザーを鳴らしたのだ。

「誰だ鳴らしたのは!ちくしょう、てめえのせいだぞ!!死ね!」

犯人が拳銃を杏に向けたとき。

誰かが投げた石が当たり犯人の手から拳銃が離れた。

「つつ、ツ誰だ!？石を投げたのは!？」

怒り狂った犯人が客のほうを振り向くと一人の男が立っていた。

俺だった。

「テメエ・・・殺してやる、殺してやる殺してやる!!!」

犯人は懐からナイフと取り出し、襲い掛かってきた。

これが俺の死に方。杏を犯人から庇い、刺されて死ぬ。

我ながらなかなかの死に方だ。

さつき杏を怒鳴ったのは、どうしてこんな奴のせいで死ぬんだ、  
そう思ったからだ。

しかしそんな死に方も悪くないかもしれない。

『本当にそう思うか?』

え?

『お前は本当にそう思ってるのかって訊いてんだよ』

それは・・・。

『はつきりしろ。俺はそういう奴が嫌いなんだ。さあ訊こう、お前は死にたいのか?死にたくないのか?』

・・・たくない・・・。

『ああ?』

俺は・・・死にたく・・・ない。

『・・・よう言った。んじゃ後は任せろ』



「陣だ」

「陣？」

「そう、仁義の仁じゃなくて陣地の陣。分かったか？」

「わかった！とりあえずメモとっとこ」

「よし、それじゃあの俺の死の元を叩くとするか」

起き上がった強盗が今度は椅子を持っている。まったくまあ懲りない奴だ。

「とりあえず武器は・・・あ、あいつのナイフ。まあこいつでいいか」

「ごちゃごちゃうるせえ!!!」

椅子を振り上げながら強盗が近付いてくる。・・・無駄な事なのに。

「椅子は振り回すもんじゃねえよ。とりあえず」

強盗が持っている椅子をナイフで両断する。

「置いとけ」

強盗が唾然とした顔で俺を見ている。たしかに、普通ありえんわな。小さなナイフで鉄製の椅子を両断するなんてことは。普通は。

「この眼、なかなかいいな。仁の攻撃力である俺にふさわしい眼だ」

仁の眼の力が自分の死が分かるのなら、陣の眼は他人・物の死のタイミングが分かるのだ。どのタイミングでどの方向から斬りつければ物が壊れ人が死ぬか、陣の眼はそういう力なのだ。

「んじゃ、とどめってことで」

ナイフを強盗に刺そうとしたとき。

「警察だそこを動くな！」

後ちよつとの所で警察が来た。

「ちつ、いいとこだったのよ。後は頼むぜ、仁」

そう言って陣は俺の中に消えていった。

そういえばもう何年も前の事だ。喧嘩に負けてばかりだった俺は、おれ自身にある事を望んだ。喧嘩に勝てる自分が欲しいと。力のある俺が欲しいと。そう願っていたある日、俺の中にもう一人の

俺がいた。俺はそいつに自分と同じ名をつけた。陣という名を。

「つまり、あの時戦っていたのは陣さんだったというわけですね  
」！

「まあそう言う事だ」

「つまり仁さんは多重人格というわけですね！」

「いや、そういうわけじゃないんだ。仁のときも陣のときも俺の意識はある。多重人格というより多重性格といったほうがいいかな」

「なるほど！メモメモ・・・」

とりあえず取材的なのは受けているが、陣のことは書かないように頼んでおこう。

あくまでも学校新聞に載る時は、強盗の現場にいた不幸な少年Aとして載ろつ。

## 仁と陣（後書き）

読破していただきありがとうございます！次回も読んでいただけるとうれしいです！

腐食魔眼（前書き）

## 腐食魔眼

とある住宅街の一角。人目につきずらく、不良達がたむろするところで、事は起こった。

大量虐殺事件。現場はひどい有様だった。

何人もの死体が倒れ、腕や足がもげているものもあった。

そしてもつとも不可解だった点は、その死体の半数以上が腐っていたという点だった。

「新聞部です。学級新聞ができましたので是非読んでください」

「い

」  
「・・・新聞部です。学級新聞ができたので読んでください・・・」

「

「仁さん。何ですかその元気の無さは！もつと腹から声を出して  
こう・・・新聞部です！！新聞読んでください！！ほら仁さんも」

「嫌に決まってるんだろ。大体なんで俺が放課後にこんなことしなきゃならないんだ」

「それは仁さんが新聞部に入ったからです！」

「気付いたらお前に勝手に入れられてただけだろ」

「私はお前じゃありません！武並杏たけなみきょうという名前があるんです！」

「分かった分かった。じゃあ杏、俺はもう持ってた分の新聞配り終わったからもう帰るぞ」

「どうぞ。今日もお疲れ様でした」

校門前で杏が手を振っているが、俺はそれを気にもせず自宅に向かった。

しばらく歩いているといつも使っている交差点が見えてきた

「ええつと。今日はここを左に曲がらなきゃいいんだな」

俺はいつも左に曲がる交差点を、今日は右に曲がった。

他人にはこれを気分だからと言っているが、これは気分で曲がったのではない。左に行けば死ぬと分かっているからだ。

自分の死の分岐点と死の瞬間が視える特異な眼、俺はこの眼を『自死の目』と呼んでいる。

この日『自死の眼』が移したのはここを左に曲がる光景だった。だから俺は右に曲がったのだ。

ちなみに、この眼の事を知っているのは杏だけだ。先日のある事件の後、杏にこの眼の事を話した。だから杏は知っている、ただそれだけだ。

「しかしここからどうやって帰るか・・・っ！」

突然俺の目に激痛が走った。そしてこれまで見たことの無い光景が目の前に浮かんだ。

一人の少女、崩れた廃墟、堕ちていく俺。

「・・・今のは一体・・・」

俺は今の光景の意味も分からず、ただ歩き続けた。

しばらく経って俺は路地裏を歩いていた。あの交差点を曲がってからただ気分で歩いていたらこんな道を通っていた。

「さてここからどうやって帰るか……」

頭の中で現在地と帰宅方法を考えていたときだった。物陰から人が飛び出してきた。飛び出してきた男は体中血まみれで右腕は腐っていた。

「あう……ああ……たす……けて……死にたく……な……」

泣きながら俺に助けを求めた男は全てを言い切る前に死んでしまった。

「……腕が腐ってる……これって、確かニュースに出てた」

今日の昼休み。杏との会話で話題にあがった大量虐殺事件。男の腕はその死体の特徴と酷似していた。

俺が死体を更に調べようとしたときだった。

奥の道から足音が聞こえてきた。

コーン、コーン足音は不気味なほど路地裏に響いていた。

「ひひひ……その人死んじゃったの？死んじゃったの？ベリ―つまんない」

足音の主はまだ幼い少女だった。短く切られた茶色の髪。フリフリ  
の服。脇に抱えたくまのぬいぐるみ。見ただけではちよつといい  
所出のお嬢ちゃんと言ってもおかしくない。

しかし、実際彼女に会い、彼女の言動を聞き、彼女の眼を見たら  
そんな事は思えないだろう。

「狂ってる。としか言いようが無いな」

「ひひひひ。ベリーは狂ってなんかいないよ。ベリーはベリーだ  
もん。あなたこそ狂ってるんじゃないの？ベリーはそう思うよ。ベ  
リーはそう思うよ」

「同じこと二回も繰り返してる時点でおかしいだろ。・・・一つ  
訊きたい。コイツを殺したのはお嬢ちゃん？」

「うんそうだよ。ベリーが殺ったんだよ。ベリーが殺ったんだよ」

信じたくは無かったが、やっぱりか・・・。

「そのおじさんはね、ベリーが魔女だって言ったのに信じてくれ  
なかったの。それでね、おじさんは言ったの「だったら魔法を見せ  
ろ」って。だから見せてあげたの！ベリーの魔法！ベリーの魔法！」

「りゃ、まともな会話はできそうに無いな。

「そうだ！お兄ちゃんにもベリーの魔法を見せてあげる！」

「なっ！!?」



「・・・殺すなよ」

『さあな』

「誓わないなら変わらん」

『ちっ！・・・わかった誓う』

「よし。じゃあ任せたぞ、陣」

俺は鞆からナイフを取り出し、あの女の前に出た。

「きゃは。お兄ちゃんいた。お兄ちゃんいた。ベリーの魔法見て！ベリーの魔法見て！」

「ぶっ。いちいちうるさいガキだ。そんなモンに付き合う気はねえ！殺してやるよ！」

仁との約束など知ったことが！

「・・・お兄ちゃんもベリーのこといじめるの？」

「ああ」

「・・・やっぱりそうなんだ。みんなベリーのこといじめるんだ！いじめるんだ！！」

急に女の口調が変わった？さっきまでの狂ったようじゃべり方とも違う。もっとおびえるような、怒り狂うような。

「殺してやる殺してやる殺してやる！！ベリーをいじめる奴は皆殺してなる！！！！」

ベリーが手当たり次第に周りを腐らせ出した。

「くそ！これじゃ反撃がしずれえ！」

さつきから眼に力を発動させているが一向に斬るタイミングが分からない。

「さすがにもう・・・」

「少年、そこを左にかわしな」

「！！？」

うまく判断できなかった俺は咄嗟に声の通りに動いた。

「そしてそのまま逃げな」

再び声に従い、俺は全力でその場から去った。

俺が走って来た場所は工場の跡地だった。

「ふう。ここまでくれば安心だよ。少年」

「・・・お前か。俺に命令したのは」

俺は俺の目の前にいる中年のオッサンに言った。

「命令とは失礼な。ただ助けてあげただけだよ。それと僕のごことは隠れ屋と呼んでくれ」

それが余計だったんだ。

「君はあの少女か何者なのか知りたくないのか？」

「・・・多少の興味はある」

「じゃあ教えてあげよう。彼女は鬼城きじょう瞑里べいり。そこそこいいところお譲ちゃんだった」

「『だった』？」

過去形？

「そう。お譲ちゃんの家がイイとこだったのは少々昔の話。今は廃れて見る影も無い。家庭内にも問題ありだね」

「どういうことだ」

「暴力だよ。彼女は昔から親に暴力を受けていたんだよ。しかしそんなある日、彼女は不思議な力に目覚め自分をいじめた家族を皆殺しにしたんだ」

「その不思議な力つてのが、さっきのアレか」

「そう。通称『腐死の眼』。見て指定したものを腐らせる力を持つ」

「てめえは何でそんな事知ってたんだ」

「そんな事はどうだっていい。今重要なのは、どうやって彼女を止めるかだ。きっと彼女は僕らを追いかけている」

「だろうな。俺の死に場所とここはそっくりだ」

たぶんここが勝負どころだろうな。

「さあもうすぐ彼女はここに来る。君はどうする？」

「迎え撃つに決まってるんだろ」

「そうか。ならがんばりなさい。ハッピーエンドを期待してるよ」

そう言っつて男は闇の中に消えていった。

「きやは。お兄ちゃんいたあ」

そして入れ替わりにベリーが入ってきた。

「よう譲ちゃん。久しぶりだな」

「久しぶり久しぶり。お兄ちゃん今度こそベリーの魔法見て、そ

れで………死んで」

その途端に俺の横にあったいすが腐りだした。くそ！いきなりか！

「ケドもうそんなんやあたんねえぜ！！今度はこっちの番だ！」

俺はナイフを構えてベリーの元へ突っ込んだ。

「……来ないで……来ないで！！」

しかし遠距離攻撃の無効のほうやはり有利だ。なかなか近付けない。

「くっそ……うわあ！！」

俺は突然足を滑らせて転んだ。足元を見てみると腐った床が湿気を帯びていた。

「もう終わり」

そしてベリーは俺のすぐ傍まで近寄ってきてそう言った。

「ベリーのこといじめるからいけないんだよ。みんなお兄ちゃんがいけないんだよ」

チャンスだ。今ならこいつを殺せる確実にやれる！

俺がナイフを持ち直しベリーを斬り付けようとした時だった。

『待て陣』

(なんだ？今チャンスなんだよ！お前だって生き残りたいだろ！)

『そうだけど待て。それで俺に変われ』

(バカじゃねえか？攻撃力の無いお前が出てなにができる？お前はすっこんでりゃいいんだよ！)

『いいから変われ。じゃないとおまえ自身の存在を消すぞ』

(てめえ……死んでも後悔すんじゃねえぞ)

『ああ』

俺の意識がよみがえった時、ベリーは俺に人差し指を向けていた。

「お兄ちゃん、死んで」

もうこれしかない。俺に、仁にできる事は。

俺は両手をベリーの背中に回しそしてベリーを思いっきり抱きしめた。

「……………え？」

あまりの行動にベリー自身も声が出ないようだ。もしかしたら誰かに抱きしめられるのはこれが初めてなのかもしれない。俺はそう思った。

あの男は言っていた。ベリーは昔から暴力を受けていたと。

もしそれが原因で眼が覚醒したのなら、こつするのが一番の解決策だと思ったからだ。

陣には決してできない、俺の解決法。

「つらかったんだよな。苦しかったんだよな。でも、もう大丈夫だ」

「おにい……ちゃん……」

「これからは俺と一緒にいてやる。守ってやる。だから安心しろ」

「……ひぐ……う……うえええええええええええん」

ベリーの幼い泣き声が工場内に響き渡った。

家の親はともやさしい親で養子なんかもすんなり受けてくれるような人達だ。ベリーの事もきつと受け入れてくれるだろう。

「お兄ちゃん！朝だよ！」

「ふぎゃー！」

その数日後。瞑里は本当にうちの家族になった。両親達に瞑里の事を話したら予想通りあっさりOKしてくれた。

「ね、お兄ちゃん遊ぼうよ。遊ぼうよ」

「待て待て。せめて着替えてからにさせてくれ」

「うん！」

たく。やれやれだ。

「仁さん！遊びに来ましたよー！！」

その上杏まで・・・今日は本当に疲れそつだ。

## 腐食魔眼（後書き）

久しぶりに投稿しました雪無サンタです。

いかがだったでしょうか？本人的にはなかなかの終わり方だった  
と思っています。

ご意見ありましたらぜひメッセージを送ってください。

最後に読破、ありがとうございます！

## 堕ちていく己

無差別殺人。誰か一人を目的とするのではなく、大量の人間を殺すことを目的とした殺人。

「おにいちゃん。はやくはやく、特売品売り切れちゃうよ」

「そんなに急がなくてもいいぞ。タイムサービスがもうちょい経ってからだし」

「はやくはやく!」

「・・・わかった。ベリー急ぐぞ」

「うん!」

・・・ええつと。今現在の状況だが、母親の頼みで俺は妹といっしょにスーパーに行くところだ。

「おにいちゃん疲れた・・・」

「走り出してから1分も経ってないはずなんだけどな」

「つゝかゝれゝたゝゝ!」

・・・

「・・・わかった。おぶってやるから急ぐぞ」

「わ〜い」とベリーは大喜びで俺の背中に飛びついた。ったく。ベリーと俺は本当の兄弟ではない。旧姓きしやう鬼城べいじやう瞑里。元々はかなりいいところのお嬢様みなづきだったらしいのだが、色々あって、今は俺の妹の水無月みづつき瞑里べいりだ。

「ところでベリー」

「なあに？」

「お前、前の家が恋しいと思ったことはないのか？」

「無いよ」

えらくハッキリしてるな。

「前にすんでたお家はみんなベリーのこと叩いたもん。皆が旅行に行く時だって一人でお留守番してばっかりだったし」

「……………」

今改めて聞くとかなりひどい。おそらく、ベリーが言っているのもほんの一部なのだろうが。

「……………気に食わねえな」

「おにいちゃん？どうかしたの？」

「いや。なんでもないそれよりこっからはダッシュだ！しっかりつかまってるよー！」

「うん!!」

そう言っただけ俺は全速力でスーパーに向かった。言葉の語尾の変化に気付かないまま。

「つまり。果報は寝て待っても来るか来ないかは分からないのです! だったら動いたほうが言いに行きまわっています!」

「……で、町中事件探して歩き回れと」

「そのとおりなのです!」

ベリーとの買い物のおと、適当に町を散策していたら、しよつちゆう俺に声を掛けてくる変わり者の新聞部、武並杏たけなみきょうにつかまってしまった。

「最近一番有名なのは路地裏大量殺人です。とりあえずこれについて調べましょう!」

「調べてるもの決まっていたのかよ。」

「……路地裏大量殺人?」

「ニュース見なかったんですか? 先日この近くの路地裏で大量の

死体が発見されたんですよ。子音はみんな刃物による刺殺。殺された人達に共通点は少なく、無差別殺人つてことで調べられてるそうですよ」

「ほお。で、もし犯人見つけたらどうするんだ？」

「取材します！」

バカですかこの子は。

「では二手に分かれて探しましょう。何かあったら携帯に連絡下さい。解散！」

そう言つと杏は全速力で走り去ってしまった。・・・俺振り回されてばっかだな。

「・・・とりあえずその辺ぶらつくか」

俺はその辺に公園でもないものかと思いつながら歩き出した。

「あ。公園。・・・とりあえず一休みするか」

俺は偶然見つけた公園に入りそこに置いてあつたベンチに座つた。さすがに休日という事もあつてか結構な人数の人がいた。いろいろな噂話やら都市伝説やらが俺にまで聞こえてきた。

『ねえ知ってる？三味線つて実は猫の皮でできてるんだって』

『深夜の3時33分33秒にあそこの神社の鳥居をくぐると不幸になるんだって』

『ピザって十回言ってみて』

それは都市伝説ではないだろう。

『そういえば奥さん聞きました？こないだあった殺人、あれって学生がやったらしいのよ！』

さつき杏が言ってた話しか。

『まあ本当！？』

『本当よ本当！さつき警察が喋ってるの聞いたんだけど、なんでもジャージ姿でナイフを持ってたらしいのよ！』

……ジャージ姿でナイフ？

『『怖いわねえ』』

……

「すみません。ちょっといいですか？」

俺は話をしていた奥さん方に声を掛けた。

「あらどうしたの？」

「高校の新聞部なんですけど、良かったら今の話し、詳しく聞かせてもらえませんか？」

「あら。聞かれちゃったの？しょうがないわね何が聞きたいの？」

「まず犯人の事なんですが……」

……違つよな。

まさか……あいつじゃないよな。

……陣……

その夜、俺は家族に事件があつた日の俺の行動について聞いた。何でも俺は夜遅くにコンビニへ行くと行って出かけたそうだが、まったく記憶にない。夜家を出たことも。コンビニへ行ったことも。

「……お前が全部やったのか？陣」

さあ。何のことだ？

「とぼけるな。いろんな奴に聞いたが犯人像はほぼ間違いなく俺だ。だとしたらお前がやった以外に考えられない」

なに言つてんだお前は。俺達は多重人格じゃなくて多重性格だろ？お前の意識がないなんてありえないだろ。

「ッ！ー！」

そうだった。俺と陣は多重性格。人格を二つに分け切れなかった中途半端な存在。

そんなに気になるなら、俺に変われ。真実が分かるとこまで送ってやるよ。

「お前を疑ってるのに人格を渡せるか」

そういうなよ。だめだと思ったたら強制的に奪い返せばいいだろ？

「・・・わかった」

そうこなくつちな

そして俺は陣と入れ替わった。

「・・・さて。じゃあ見せてやるよ。真実を」

俺は夜の街を歩いていて。街灯も少なくなかなり暗いがさっきから目も慣れてきているのでそう難はない。

「やあ。また会ったね」

目の前に現れたのはベリーと戦ったときにも現れた中年のオッサ

ン。隠れ屋だった。

「君と会うときはいつもそっちの子だね。こんな夜更けにどうしたんだい？」

俺はポケットからクシャクシャになった手紙を出した。

「こないだの夜。てめえが俺に渡したんだろ？言われたとおり来てやったぜ」

この手紙は事件のあった日、コイツから俺が受け取ったものだ。内容は今夜、商店街はずれの廃ビル前に来い。というものだった。

「うれしいねえ。本当に来てくれるなんて思っても無かったよ」

嘘ばっか言いやがって……。

「じゃあ行こうか。目的地はこの地下室だよ」

そう言っただけ俺達は廃ビルの地下へと降りていった。

途中で隠れ屋がこちらを向いた。

「ああそつだ。これあげとくよ」

隠れ屋は俺に向かって1本の日本刀を投げてきた。

「夜桜。そいつの名前さ。人によってはその刀を名刀と呼び、人によっては妖刀と呼ぶ代物さ。役に立つだろう。さあ。お入り」

そして俺は地下室の扉を開けた。部屋そのものはかなり広く、1

00人くらい平気ではいれそうな感じがした。  
そしてそこには何人もの凶暴な顔をしたやつらが集まっていた。

「彼らは君達と同じく特異な眼をもった者達だ。生き残りたかったら、勝ち残れ」

そう言っただ奴は扉を閉めた。なるほど。やっぱりそういつつもりだったのか。

『陣、俺と変われ。何とかしてここから出る』

「うるせえ」

その途端仁の声が完全に聞こえなくなった。  
これで存分に暴れられる。

「いくぜ。雑魚共!!」

そう言っただ奴は夜桜を鞘から抜いた。そしてこの瞬間が。  
名刀が妖刀に名を墮とした瞬間だった。

## 堕ちていく己（後書き）

突然ですがあと2話くらいでこの小説は終わります。

最近新作を書いていますので完成したら是非読んでください。

## 最後

その惨状はまさに地獄と呼べるものだった。

町外れの廃ビルの地下。異能の眼を持つ者達の血が部屋中を覆っていた。

一人の少年の手により。

一人の悪魔の手により、この惨劇は完成した。

「おらおらどうしたよ？その程度かオラあ！！」

少年はただ目の前の獲物に向かって刀を振るっていた。目の前で逃げようとするものに、猛然と立ち向かってくるものに、とにかく刀を振るった。

ここにいる者達は全員その気になれば片手間で完全犯罪をやつてのけるような力を持つものばかりだ。しかし、少年、陣の力はその誰よりも飛びぬけていた。

「……これで最後か……期待はずれにも程があるぜ」

顔についた返り血を手でこすりながら俺は言った。戦闘のはじめの方についた血は既に固まりかけていた。

「はっ、俺自身がやつたって分かってるのに。こりゃ、改めて見るとおぞましい光景だこつた」

部屋中は能力者たちの血で赤黒く染まり、壁という壁には切り裂いたときに飛んだ血がついている。

常人がこれを見たら5分で発狂するだろう。

「いやおめでとう。よく生き残ったね」

赤黒く染まった部屋に中年の男の声が響いた。俺をここに呼んだ張本人。隠れ屋。

「そりやあどうも。こいつのおかげでなんとかなっただぜ」

そう言っただ俺はこいつからもらった刀、夜桜を軽く持ち上げた。

「そりや良かった。そいつは君にあげるよ。そいつを持ってさえいれば君はずっと君でいられる」

「みただな。こいつを持ってから仁の声が聞こえなくなったから、まさかとは思ってたけど」

「というわけで今日はこの辺で帰ってくれないかな？この死体、片付けないといけないから」

「……ちよつと待て。あと一人殺したい奴がいるんだ」

「……予想はできてるけど、誰かな？」

「予想通りテメエだよ!!」

俺は目の前の獲物に向かって思いつきり夜桜を振るった。軽く地下の壁を切り裂いたが隠れ屋には当たらなかった。

「やっぱり僕かよ!!危ないな〜!なんてことするの!死んだら

どうするの!？」

「いいだろ。テメエはどうせ殺せないんだ。だったら殺せるようになるまで殺し続ける!！」

コイツは俺の眼の力を持ってしても殺し方が分からなかった。さつきから何度も心臓やら脳やら狙っているのになぜか直前で狙いがずれる。

「そんなめちゃくちゃな理論を掲げられても・・・僕は殺せないよ」

「ッ!？」

その途端、隠れ屋の目の色が変わった。常に外にいる傍観者の目から、獲物を狙う殺人鬼の目に。

「君がそこまでいうなら容赦はしないよ。まったく、せっかくその刀もその眼もあげたのに、親にはむかう子はいらぬよ」

隠れ屋は俺に向かって石を投げてきた。

「そんな物に当たるわけないだろ!！」

俺は飛んできた石をかわした。

その瞬間、空中を移動していた石が爆発した。

「な、があ!！」

かわす動作をしていたおかげで直撃は免れた。

「魔眼其の一『爆死の眼』触れた無機物を爆発物にする力。そして」

今度は俺を指指した。・・・あの動作は!?

「つく!?!」

俺は体をひねりながら岩陰に飛び込んだ。指差した先にあった男の死体が急速に腐敗した。

その動作を見ている間に大量の刃物が俺に向かって飛んできた。回避動作の直後だった所為で俺は避けられず体中に刃を受けた。

「ぐつがっ!?!?」

「其の式『腐死の眼』。こいつは知ってるね。そして今やったのが僕の目の力であり、君の力の元々の姿。『着死の眼』」

「・・・・・・着死・・・?」

体を壁につけながら俺は奴の言葉を繰り返した。

「そう。全てのものに死を与える力を与える眼。小さな刃物を操ることもできるし、誰かに似たような力を与えることもできる」

「じゃあ・・・俺の眼も・・・ベリーの眼も・・・」

「み〜んな僕の力。そして最終的に君は失敗だった。一人の子に二つの眼を与えるって言う挑戦だったけど、結局は失敗。表の子は優しすぎるし、裏の君は甘すぎる」

「・・・甘い？」

「だって君、ここにいる奴ら。誰も殺してないでしょ」  
殺してない？そんなバカな。

「がっかりだよ。もう君に用はない。ああそうだ。表の小書きに  
してたから言うけど、今までの大量殺人は君じゃなくて僕だよ。ち  
よつとした工夫で学生っぽくなってね。じゃあ・・・死ね」

隠れ屋は俺の持っていた刀を無理矢理奪い取り、そして俺に向か  
って振り下ろした。

その瞬間。俺は完全な水無月仁だった。

「最初の質問ですけど、なぜいつも事件にあうんですか？」

「・・・知らん」

そこは市内の病院だった。7階のとある病室で俺は寝ていた。横  
には見舞いと称して事件の取材に来た新聞部の杏が。

あの夜。俺に刀が刺さる直前に警察が飛び込んできて、隠れ屋は  
警察の銃弾に当たり死亡した。俺は被害者としてこの病院に入れ  
られた。あの場の唯一の生き残りとして。

「……なあ、杏。お前には話すけど、地下室のアレをやったのは殺された奴じゃない。俺だ」

突然の衝撃告白に杏はキョトンとした顔で俺を見ている。

「……で、次の質問ですが」

「聞いてたのかお前！？あの場にいたやつら殺したのは俺なんだぞ！」

「けど、仁さんは被害者って言われてるじゃないですか。だって被害者なんです。もし本当に貴方が加害者なら」

「私が一生貴方のそばで監視してあげます」

杏はすうつと一呼吸してそう言った。

俺の人生初。もしかして、愛の告白って奴か？

「……じゃ、じゃあ次の質もんづすが仁さんは休日何してチユンデスか！！？」

言った本人もテンパってるのか言葉がめちやくちやだ。

「……そうだな。公園を散歩したり、義妹の相手をしたりだ。ん？どうした？」

杏が今度は啞然としていた。

「は、初めて質問に答えてくれました！しかも今まで見たことの

ナイ優しい微笑で！やりました！！大進歩です！！！」

バンザイ！と両手を挙げて大喜びだ。

「今度一緒に行かないか？結構いい公園知ってるぞ」

「そ、その時はよろしくお願いします！そういうば、今はどつちのジンさんなんですか？」

杏に訊かれて俺は少し考えた。たぶん、陣はもういない。何となくそう思った。眼の力も無くなって、俺は俺になった。けど俺は杏の質問に対し、ちよっと悪戯気分で短い言葉を返した。

「・・・さあな」

## 最後（後書き）

死線の向こうを読んでいただき、ありがとうございました。自分にもっと力があればもう少しいいものができたんじゃないかな？という思いもありますが、今回でこの小説は終わりです。これから他の作品及び新しく出る小説を読んでいただけると嬉しいですよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8094h/>

---

死線の向こう

2010年10月9日11時07分発行